



皆の集まるホールと屋外広場を中心に、風景や光の感じられる居場所の散りばめられた、熊野町のみなさんの心のよりどころとなる「丘のような地域防災センター」を提案します。

業務の実施方針及び設計コンセプト

人びとの生きる力を育む場となる

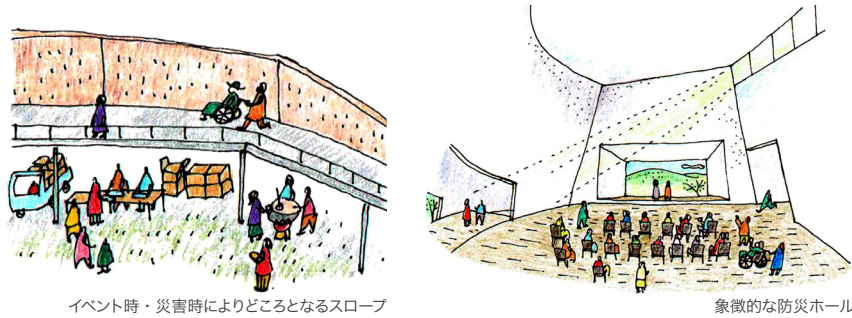
私たちは、本プロジェクトの設計を通して災害の経験と記憶を真摯に受け止め、引き継ぐとともに、町の未来をともに考えていく役目があると考えました。その役割を、以下の3つのコンセプトとともに実現します。

- 1 空間提案、構造・設備計画、プログラムづくりといった様々なレベルにおいて、日常時と災害時を連続的なものとして捉え、日々の創造的な場の使いこなしが災害時の備えとなる計画とします。
- 2 子どもから大人、赤ちゃんのいる家族、高齢者、障害のある人、ペット同伴の人といった多様な価値観を受け止め、ともにいられる空間をつくります。
- 3 山々に囲まれた美しい自然風景に呼応し、地形、ランドスケープ、広場、そして建築が一体となった、まちの皆さんの心のよりどころとなる建築を目指します。

特に重視する設計上の配慮事項

ものづくりの町を象徴する「ここにしかない空間」を目指す

熊野筆がそうであるように、他にないものを妥協せずつくることが、長く愛され、引き継がれていくものづくりの姿であると考えます。「一筆書きののびやかなスロープ」「風景とつながる防災ホール」「大きな屋外広場」によって、訪れるたびに皆の創造力を後押しする空間をつくります。



取組体制

ともにつくるプロセスを大切にする

災害時・日常時における場の使われ方を丁寧にヒアリングし、地域に根ざした建物とします。また、ワークショップ等を通じて、完成後の使い方をともに想像し、試験的に実践することで、町の人々が自らの暮らす環境の変化に直接関わる機会を大切にします。



設計チームの特徴

確実性・柔軟性・行動力を活かした実施体制

・若手設計者であることを活かし、いつでも熊野町にかけつける行動力と、対話によってともに考える柔軟性をあわせもつチームです。意匠設計者は、滋賀県にて指定避難所となる中央公民館（2600m²）や、尾道市にて防災拠点（300m²）となる市庁舎の設計・監理経験があり、防災拠点としての機能や予算・工期の管理を確実にを行います。・構造設計者は広島県出身で、情熱を持ってプロジェクトに取り組みます。教育施設・文化施設など多数の公共建築の実績があり、プログラムに応じた適切な構造計画を提案します。設備設計者は防災機能の必要な公民館や大企業の本社屋などの実績があり、日常時はもちろん災害時も想定した設備計画をします。意匠・構造・設備設計者はともにこれまでも協働してきた実績があり、チームワークを活かした迅速・確実・創造的な実施体制とします。

広域計画

周辺施設と連携し、まち全体について考える

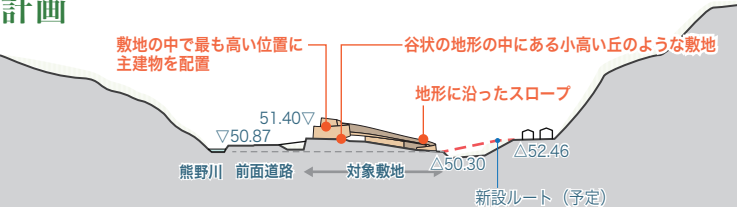
子育て世代に人気のある西部地域の「くまの・みらい交流館」、地域の健康を支える大きなグラウンドや浴場のある「東部地域健康センター」等、既存施設の特徴を考慮し、東部地域防災センターを防災と交流の拠点として、皆が日常から楽しみながら「生き抜く力を育む場」となることを提案します。建物をつつ建てるのが、まちづくりのきっかけとなるようなプロセスを目指します。



配置計画

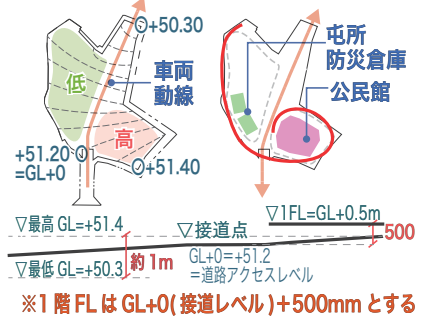
地形を読み解き、建物を安全に守る配置計画

本敷地は、谷状地形において周辺より小高いことで、災害時にも被害を受けにくい場所であるという特徴があります。その特徴を生かし、敷地内でも最も高い場所に主建物を配置する計画がふさわしいと考えました。



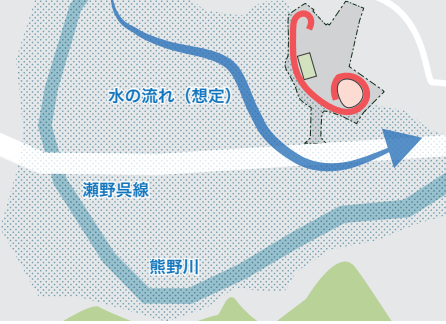
敷地の1番高いエリアに建築

敷地には約1mの高低差があり、敷地内通路によって大きく二つのエリアに分かれます。標高の高いエリアに主建物を建て、分棟としても機能上問題のない屯所と防災倉庫を、道を挟んだ向かい側に立てる計画とします。



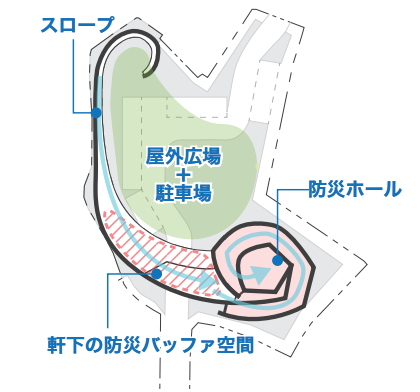
らせん壁で水から建物を守る

敷地形状に沿ったらせんの壁で建物を守ります。万が一の水害の際にもコンクリートの壁によって水を受け流し建物本体への浸水被害がない計画とします。（緊急時にはメインの開口部を土嚢や防潮板で塞ぐことで敷地全体を守ることができます）

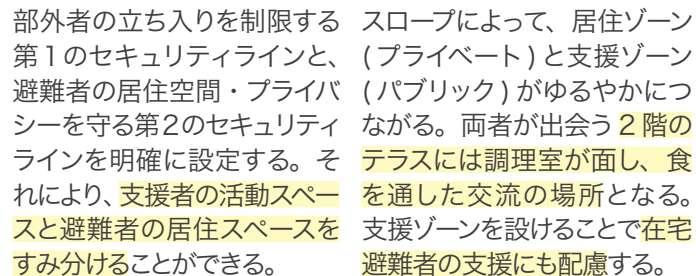


らせん壁に沿った避難動線

壁に沿ってスロープをつくることで、停電時も誰もが安全に避難出来るルートを確認。田園と一体となったやわらかい景観を生み出します。



イベント時や災害時にも、
ランドスケープと一体になって活用できる平面計画



誰もが過ごしやすい柔軟なプランニング



中心にある皆の集まる場所から、各部屋にアクセスできる。

避難時

- ・周辺の部屋は外部から直接アクセスできる。
- ・そのため共用部をEV・トイレ前などに絞って最小限化することができる。
- ・中心のフリースペースは周辺の部屋の拡張空間として利用可能。

避難時のペット同伴者への配慮
・一般の避難者と動線及びエリアを分け、**直接屋外の軒下空間からアクセスできる。**

乳幼児世帯への配慮
・キッズルームを避難場所とし、**非常用発電機によるエアコンの利用が可能。**授乳室および水回りに隣接している。

2F 平面図

舞台背面を開け放つことで
風景とつながる

曲面を生かした講義室

ホールを控室
としても利用
できる和室

広場を見渡せるテラス

交流ラウンジと地域カフェを
つなぐ吹抜

テラスと一体的に
利用できる調理室

吹抜

ステージ

準備室

和室 1

和室 2

テラス

和室 3

防災ホール
+5000

交流
ラウンジ

一体利用

シャワー室

災害時空調を
使用できる小和室

使い勝手により選べる
大小の和室

熊野の山々を
眺められる防災ホール

災害時空調を使用する

も使用できるストーブを設置

テラスに面した縁側

山へ向かって視線が抜ける

大きな広場から独立した、
こどもが安心して遊べるテラスと広場

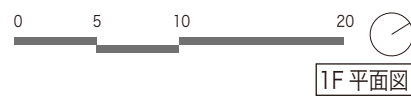
こども広場

足洗い場

災害時にも更衣室や
授乳室として利用

災害時空調を使用する

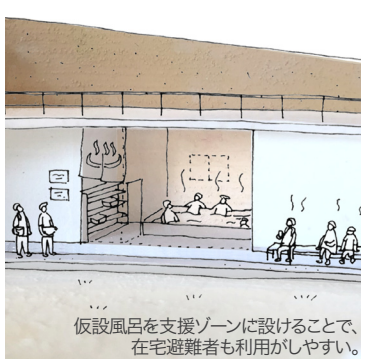
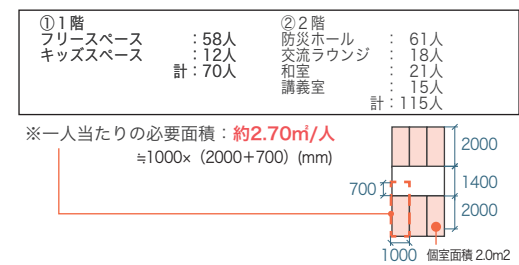
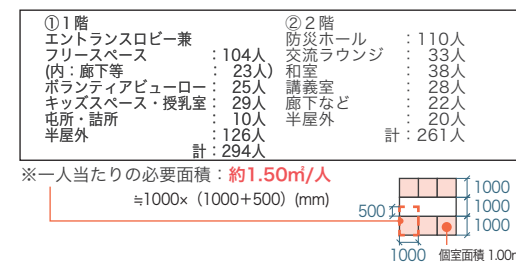
テラスは災害時に屋内化でき、ペットの居場所にも
独立したアクセスを確保



災害時の状況に応じたフレキシブルな利用が可能なゾーニング計画

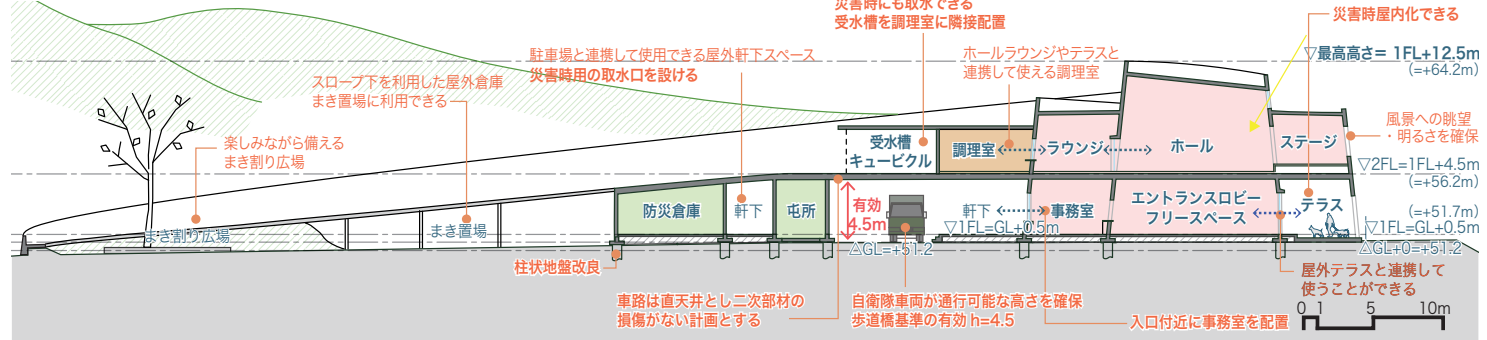
長いスロープが活動の背骨となり、敷地全体を効率的に使える計画とする。

B. 指定避難所：災害発生後 3 日目以降



ア. 災害に強いまちづくりを加速 / 断面計画

スロープにより上下階をつなげる断面計画



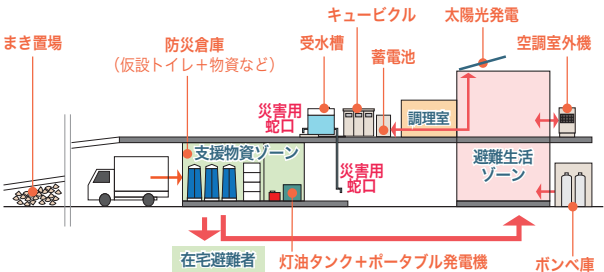


外の風景の見える防災ホール。ハイサイドライトから印象的な光が差し込む。

設備計画

日常的に使うことが備えにつながる防災設備計画

地域のお祭りやイベントを行うことが、自然と防災の訓練や備えになるような計画とします。専門性の高い機器類を極力避け、誰もが参加・操作できる装備とすることで、防災意識を高めます。



- | | | |
|---|--|---|
| ○受水槽
・ 2 階のテラスに設置。1 階の軒下・2 階テラスに災害時用の蛇口を設け、祭りや屋外イベント時に使用できる計画とする。
・ 500 人が 3 日間過ごすことの出来る飲料水を確保。
(500 人×3ℓ×3 日=4.5m3)
・ 調理室と連携できる配置。 | ○非常用電源
・ 灯油タイプのポータブル発電機を用意し、イベント時にも使用できる計画とする。
・ 春には家庭で余った灯油を持ち寄り備蓄し、防災意識を高める。
○受変電設備
・ 浸水に配慮し 2 階に設置する。 | ○トイレ
・ 一般的な仮設トイレを保管し、お祭りやイベント時にも使用する。(仮設トイレ 3 個で 500 人 3 日間の容量を満足する)
○太陽光発電 (6kw 程度)
・ 1 日分の発電量を貯める蓄電池を設けることでいつでも防災用電源として利用できる計画とする。 |
|---|--|---|

ウ. 美しいまちづくりの推進

丘のように強くあたたかい佇まいが、皆を守る避難所としてまちの新しいシンボルとなる



ゆるやかなスロープがお祭りの時には栈敷席となり、祝祭的な風景を生み出す。



1 階地域カフェと 2 階交流ラウンジが吹抜けでつながる。



車道から切り離された、安心して遊べることも広場

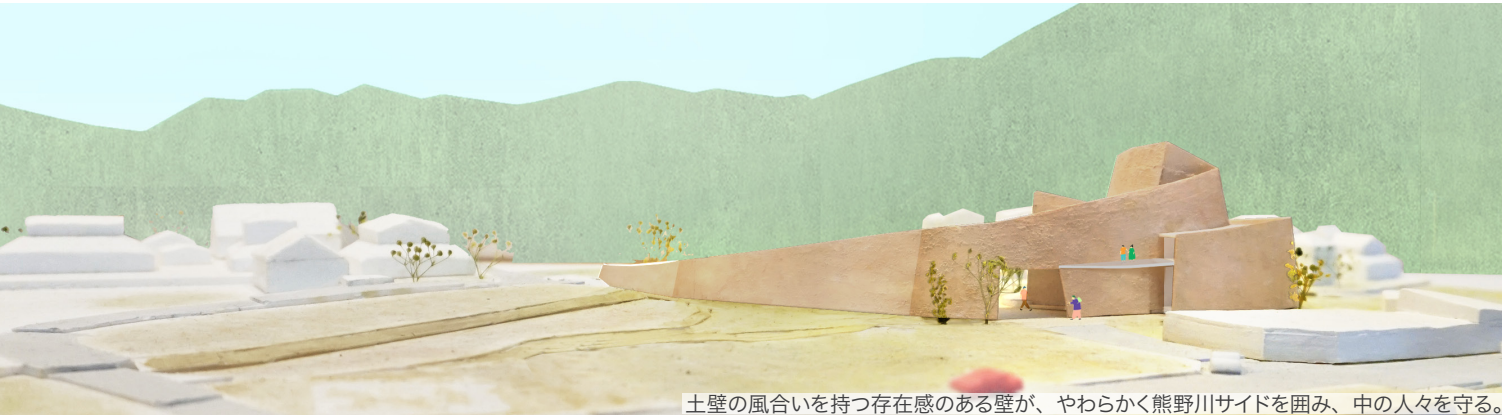
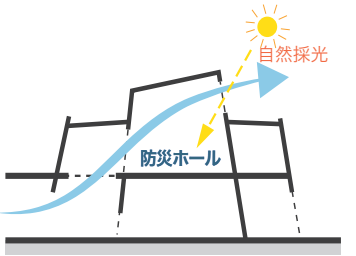
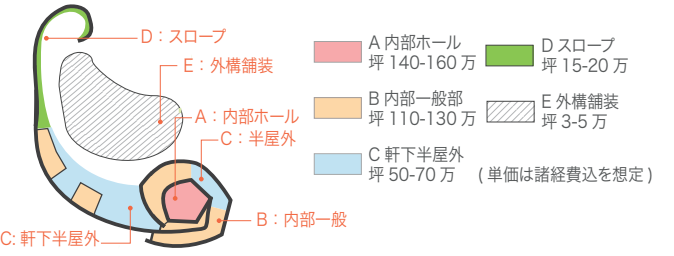
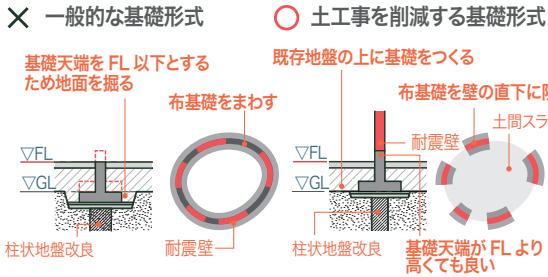
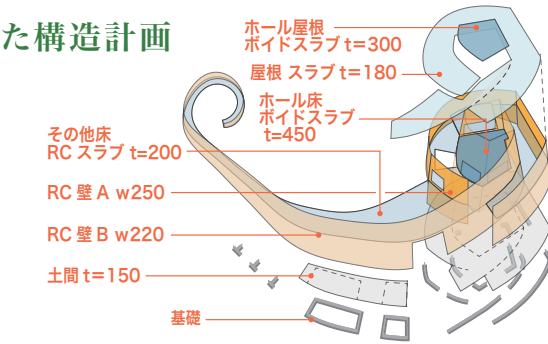


ホールと一体利用できる交流ラウンジ

エ. 実現性の高いライフサイクルコストの縮減策 / コスト管理に関する工夫及び管理方針

設計の工夫による工期短縮とコスト管理

- ・ 基礎形式を土工事の少ない計画とし、工期短縮をはかります。
- ・ 現場掘削土は、床レベルの嵩上げなどに利用し、排出土の削減を行います。
- ・ 資材不足が問題となっている重量鉄骨を使わず、RC 工事を積極的に採用し工種を限定することで、職人の確保・工期管理のしやすい計画とします。
- ・ 避難時に有効な内部空間を確保しながら、効率的な平面計画とし、無駄な面積を削減・内部動線空間を最小化することで、有効に使える半屋外空間、スロープの建築費を捻出します。(内部床面積 937m2)
- ・ 坪単価別にエリアを分け、各エリアの面積を調整していくことで、設計の初期段階から全体の予算管理を行います。



土壁の風合いを持つ存在感のある壁が、やわらかく熊野川サイドを囲み、中の人々を守る。